

す、旅人のまへなる椀の中へ落人こと奇妙なり、十人二十人の客にても、蕎麥を強侑るもの、園ただ一人にて、四方八方の客人のひかへたる椀の中へ投いる、に、一つとして把外しほかに落る事なく、悉く椀の中に入て、いさゝかも疊の上などへ溢る。事なし、よく鍛練したる者なり、たゞし園にかぎらず、相模の國は、殊に蕎麥を好む風俗にて、いづれの郷里の女にてもよし、蕎麥きりを客の椀中へなげいる、事を上手にす、別て這園は殊に上手にて、然も蕎麥を制るに大いに味ひよろしく、江戸も又他國にまさりて、蕎麥を好ところなれば、這桔梗屋の園が事を聞つたへ、故意たづねて這家にとまり、蕎麥を制せて夕餉の代となし、園が給事にて投こまる、を面白がりて、おの／＼競ひて、桔梗屋へやどりけるにぞ、太甚はんじやうして、外々の歇家やど一人も客なきときも、這桔梗屋は五十人六十人も止宿客ありしとぞ、邸家のあるじも這園を家の福鼠と稱して、よろづ心を用ひて、仕ひけり、斯の如く繁昌する事八九年、いつしか這家の妻妬忌する事おこりて、園にいとまをつかはしけり、是より後旅人の宿止も些くなりて、不繁昌となりけるにぞ、再般在郷をさがして、蕎麥を上巧に制し、上手になげ入て給事する女を抱けれども、一向嚮のことくは流行ざりし、

〔兎園小説十二集〕大酒大食の會

文化十四年丁丑三月廿三日、兩國柳橋萬屋八郎兵衛方にて、大酒大食の會興行、連中の内稀人の

分書抜略

中

蕎麥組各二八中平盛

一五十七盃

一四十九盃

一六十三盃

新吉原桐屋總左衛門

四十二

淺草駒形鍵屋長介

四十五

池の端仲町山口屋吉兵衛

三十八